

三
緣
事

底 本 〔 〕 浄土宗西山流秘要蔵 所収本（大谷大学所蔵）
対校本 〔 〕 稲垣真哲校正本（「禅林学報」附載）

* 本文中の（ ）内の文字は編者加筆

三^① 縁 事

西^② 山上人御作分

念仏の名を積する事、積名^{註1}に過ぎず。願行具足は別時意^{註2}なり。念
仏三昧の法体を積する事は三縁^{註3}なり。仏を証得する事は法界身^{註4}の積
なり。

三縁^{註4}は仏に付きたる縁なり。其の故は『観念法門』に、行者の三
心を内因とし仏の三力を外縁とすと云へり。此の縁に立する行は証^④
の位に約す。仏体に於て論ずる凡夫の行なり。故に他力の行とは云
ふなり。行とは機により顯はるるに依りて三業に出づるなり。打ち
任せたる行は因の位にて論ずるに、今の行は証^⑤の位なり。故に先づ
機につけずして仏に付けて即是其行と積す。但し此の行を然も機に

① 顯三縁事「三縁之事」

② 顯西山上人御作分「西山上人之御作分」

註1 觀經疏支義分積名門の積

註2 觀經疏支義分別時意門の積

註3 觀經疏定善義第八偈觀の積

註4 以下述成の第十五節の文と略同。

③ 顯き「け」

④ 顯證「証」

顯異本に「証」又異本に「語」

⑤ 顯證「証」

顯異本に「証」又異本に「語」

持たせる故に「彼此三業不相捨離」とは成ず。然れば唯仏にも付けず、唯機にも付けざるを親縁とは云ふなり。

此の縁は強縁なり。故に今の三業の行は強縁より立するなり。口に常に仏を称し、身に常に仏を礼敬し、意に常に仏を念ず。三業ともに念仏に積するは、念即是声の仏体、名体不二なる故に、所帰の仏と能帰の凡夫と「彼此三業不相捨離」に成じぬれば三業念仏にて有るなり。但し称すれば是を聞き、礼すれば是を見、念ずれば是を知ると云ふは、彼此と云ふ所を頭はすなり。

註したし
親と云へばとて理性の弥陀と思ひぬべき所を恐れて、「不相捨離」にして而も別なる事を頭はさんと、「彼此三業不相捨離」とは結するなり。

問。今の親仏の位にも深心の積には「若依礼誦等即名為助業」と云へり。已に称名の外に出だせり。何ぞ念仏に三業を入れて積するや。

① 猶持たせるは「持たる」
種「持せたる」

② 猶仏を「なし」

③ 猶云ふは「積するは」

註 以下「結するなり」までは述成
の第十三節の文と略同。

答。彼の積は觀仏の面なり。此は念仏の中の三業なり。但し、彼此三業とは、必ず三業相應する所を詮^①とするには非ず。衆生の三業の一なる事を顯はさんとするなり。必ず三業の互に通ずる処を詮とせば、身業意業はあれども口業は無きなり。去れば只衆生の三業の外に仏体無き所を詮とする故に、念仏に三業を入れて積す。三業の相通^{あひ}するを本意と云ふに非ず。念仏は称名を以て本願^②と云へり。他力と云ふ事は、三業を念仏と積するに顯はるるなり。自力の行の面ならば念仏は意業に限るべきなり。口称定^③んで念仏なるは三業念仏なり。故に下品下生の念を失する者、口称の下に念仏を意を以て聞くなり。「具足十念称南無阿弥陀仏」の念仏は念称一の念仏なり。

問。念即是声とは名体不二の相か。

答。念即是声とは、南無阿弥陀仏と成じ玉へる故に、声とは名号に当る、念は体に当る。故に名体不二と云ふは、弘願の体は見奉れば必ず説かざれども南無阿弥陀仏と知る故なり。此を以て欣浄縁に

① 顯所を詮、「面を所詮」

② 翻本願「本願とせり。」

註に（底本には願の字なし）

③ 翻定んで「定」

翻異本になし

④ 翻三業「なし」

⑤ 翻體を「の」

も、釈迦の言説無き先に「我今衆生極樂世界阿弥陀仏所」と云へり。弥陀と云ふ詞は『礼讚』の釈に明らけし。南無とは無能碍者の故なり。然れば弘願所成の報仏は即ち法界身の体なり。故に仏身、衆生の三業に入りて摂益をなす。衆生は仏果の三徳に帰して得生を論ずるなり。仏果^③の上の摂取を取りて因位の本願とす。故に機を仏果にもてば凡夫得生の行とす。而れば衆生の念仏を以て仏果とす。此の念仏を即ち凡夫往生の因とはするなり。凡夫の憶念は酬因の報仏に窮まり、仏の憶念は衆生の帰命に成じて、「彼此三業不相捨離」に成じぬれば、機は三業不具なりと云へども仏果の三業と一なる故に、「衆生憶念仏者仏亦憶念衆生」と釈して、三業念仏に具足すと頭はす。此則ち第三の機の上に正覚を成じ玉へるに依りて念即是声なり。

三縁はすべて行相を頭はす。近縁も見仏と積するは行相なり。念仏三昧は行体なる故なり。

註 往生礼讚の日没礼讚の始に「問

日何故号阿弥陀」と問を設けて

積す。

① 體成「異本に「具」

② 體仏「身」

③ 國仏果の「なし

④ 翻釋行相を頭はす「行相をして

頭はし、

問。^{註1} 彼此三業不相捨離の念仏ならば惡の三業を起すとも念仏なるべきや。

答。是は機の相なり。念仏は機の外にして而も余人の煩惱即菩提と觀するには非ず。其の故は雜毒虚仮と嫌ふ行は機に依りて成不を論ずる善にて煩惱賊に害せらるるなり。今の三縁の行は、機は煩惱賊に害せられながら、此に失せざる善根なり。機は間断ありと雖も、行は念々不捨者なり。故に此を水火の二河の中の白道に譬ふるなり。然れば念仏三昧は能帰所帰一体になる相なれば、南無とは能帰、阿弥陀仏とは所帰なる故に、三業の惡は南無の体とは成らざるなり。能帰の心に於て成不を論ずる縁の外の南無は、能帰六念の位にて機に成不を論ずる故に煩惱賊の為に害せらるるなり。今縁の上の南無は、「彼此三業不相捨離」の故に「諸邪業繫無能碍者」なり。爰を以て深心の積には、「不問時節久近」等と云へるを、一念にても往生を成ずれば「不問時節」と積すと心得れば、猶機に約する行

註1 此の一問答は述成の第十一節の文と略同。
① 機彼此なし

② 瞞是は「然らず、この惡は」

③ 瞞視する「觀する意」

④ 機不「否」

⑤ 瞞縁「異本に「業」

⑥ 瞞失せざる「害失せられざる」

⑦ 機に譬ふる「とは解る」

⑧ 瞞南無「異本に「南無歸命」

⑨ 機不「否」

⑩ 機論ずる「論ずるなり」

⑪ 瞞縁「異本に「三縁」

⑫ 瞞に「よって」

⑬ 機不「否」

註2 述成第十一節には「積には」と「不問」の間に

「念々不捨を、親近憶念不斷名爲無間等と結するなり。彼の積に」という文あり。

⑭ 瞞云へる「ある」

⑮ 機を「は」

⑯ 瞞節と「節久近等」と

⑰ 瞞れば「るは」

の位なり。「不問時節」等とは修行の功を用ゐざる事を顕はすなり。一多を論ずる念仏は猶善機の位にて正行の相なり。今の縁の念仏は機の功に依らざる故に他力の行と云ふなり。

問。機の外に行を立つと云はば、下品中生の文に「地獄猛火化爲清涼風」と説けり。火とは機の相なり。此の火即ち風と成る、惡即ち善と成るに非ずや。

答。火は機なり。但し此の機をはなれて他力の行顯はれざる故に、機の上に法界身と成ずる仏体なれば火化して風と為るとは説くなり。さればとて善惡不二と云ふには非ず。「煩惱即菩提」と云ふ事は定散の法の中を出づべからず。觀仏三昧或は正行の位にて論ずる法門なり。必ず中間の因行果報の法門なれば具足すべしと云へども、念仏三昧の位に非るなり。今の弘願の法界身の用の正因正行と顯はるれば、法界身の謂れ善惡不二とも説かるる事は捨てざるなり。

① 圓融にて「にては」

註 此の問答は述成の第十二節の文と略同。

② 圓成る「なれば」

③ 圓不二と云ふ「なし」

④ 圓つべからず「です」

⑤ 圓なれば「になれば」

⑥ 顯はるれば「顯はれ」

第二近縁事

「仏即応念現」等とは、第一の親縁の、三業一ながら彼此と云ふ処を第二の縁には顕はし、第三の縁には、第二の見仏(即)臨終なる事を次第に顕はすなり。然れば三縁と分別すれども念仏三昧の一体なり。

問。近縁の位に仏を見ると顕はすは観仏なるべしや、如何。

答。南無とは、発願廻向とも積する体即名号と顕はすなり。法界註身を多く現すと積するが如し。正因の見仏は見聞(一)同なり。但し聞は平生に具し、見は臨終に約す。正行の見仏は機の不同に依りて平生の見不見あり。但し近縁の見仏は観仏の位にはこえたり。定(んで)所観の見仏は化身なるべし。観仏行成の見仏は報身なり。此の位には猶近縁は念仏の見にてこえたり。

第三増上縁事

此の縁は他力往生の法体とす。此則ち「往生浄土為体」の相を顕

註 定善義第八像観の釈

① 穢多く現す「多観」

② 穢の「を」

はずなり。「衆生称念即除多劫罪」とは、「諸邪業繫無能碍者」の上に除罪と云ふは、無用成るべし。又罪なからん上は「無能碍者」の詮無き様なりと云へども、「即除多劫罪」は經文にも「於念々中除八十億劫」と説く、煩惱をば断ずと説かざる故なり。「諸邪業繫」等とは煩惱を指すなり。他力に依りて煩惱具足の凡夫報土往生の相を顯はずなり。

一義に云く、「即除多劫罪」と云へども無能碍は一つなり。無能碍の故に多劫の罪を除くなり。来迎を以ての故に滅(罪)なり。「命欲終時仏与聖衆自来迎接」等と積する故に、念仏三昧は第九門の相と云ふ。即便往生なれば臨終平生一とも云はれ、名号を成じ玉へる故に聞く位にて往生は成ず。然れば中品下生下品中生等は、聞此事已の位に往生を論じ、念仏三昧の正定業の法体は三縁の相にて有るなり。故に三縁の相を「撰取不捨」とは説くと意得べきなり。此の三縁の行なる故に他力の行と云ふなり。

① 釋云ふは「云て」

② 釋は「に」

③ 釋の「なし」

釋「は」

④ 釋無能碍は「無能碍者」

⑤ 釋多劫の罪を除くなり「多劫罪なり」

⑥ 釋に「なり」

⑦ 釋釋を「と」

⑧ 釋正定業の法体は「正法の体」

釋「正しき法体」

⑨ 釋故に他力……外縁とすと云へり「なし」

行者の三心を内因とし、仏の三方を外縁とすと云へり。故に此の縁は他力なり。然れば因縁とも云ひ仏の利益とも云ふは、「彼此三業不相捨離」なり。故に南無阿彌陀仏を仏に付くれば所求に成る、機に付くれば自身の行に成る、仏にも付けず機にも付けず中間に於て心得べし。是に依りて念仏三昧は第九門に顕はすなり。第九門の来迎に觀仏念仏あるべしといへども、仏、二体現するに非ず。一体に於て觀仏念仏の相および正因正行の相具足し玉ふべきなり。問。定善成する上に念仏を顯はす事、『般舟經』に「註²」に「註¹」に依りて定善成する上に、「欲来生者当念我名」と云へるも能詮なるべし。然れば『觀經』と差別無し、如何。

答。諸經にも念仏をば説くは一切定散二善に此の謂れを顯はす故なり。但し彼の『般舟經』は定散の上に念仏をば顯はすと云へども、何かなれば定善の行にも勝れたりと云ふ事の猶顯はれぬなり。此の經に勝れたる所をば説くなり。

註¹ 此れより以下「第九門に顯はすなり」までは述成の第十六節の文と略同。

① 釋云ひ「なし」

② 釋仏「仏を」

③ 釋および「を具し」

④ 釋相「なし」

註² 「觀念法門」に引用す。

⑤ 釋制法「対法」

問。念仏三昧は名号ならば体なかるべしや。

答。名計（ばかり）にて体無くんば三縁①の義有るべからず。彼此三業とも、目前に現ずとも、来迎とも云ふべからざるなり。

称名事

称をば、「かなふ②」、「ほむ」と云ふに心便③りあり。

増上縁事④

増上縁と云ふは有力無力あり。而るに一切は往生を（さ）うべき物にて有るを、弥陀の来迎は彼⑤にさへられぬ処の在すは即ち無力増上縁を一切の物に成ぜしめ玉ふにて有るなり。機の、願力に依りて信心成ずるは即ち有力増上縁にあたり云云。

自余衆行之事

三縁を云ひ畢りて又是くの如く積するは、三縁の故に諸行は「全非比較也」と云ふなり。諸経の中に演ぶるも三縁の故なり。自余⑥（の）衆行と指すは雑毒の行等なり。「四十八願中唯明專念」等と云ふ事⑦

① 體の義「なし」

② 固かなふ「かなふといふ」

③ 固心便り「心の便」

④ 固増上縁事「なし」

固（今私に加う）と註す。

⑤ 固彼にさへられぬ「彼はされられぬ」

側註に、（異本に「彼はさへられぬ」）

⑥ 固等「なし」

⑦ 固事「なし」

は、今此の積にては修諸功德の願を諸行往生の願と云ふ義たがへり。故に第十九の願は正因の上の正行と意得るなり。

「専念弥陀名号」と云ふは、今の念と云ふは名号を念ずるなり。

名号と云ふは阿弥陀仏なり。阿弥陀仏とは無碍光如来なり。是を念ずるなり。無碍光とは撰取不捨なり。故に『礼讚』には念仏衆生撰取不捨の故に阿弥陀仏を名号とは積するなり。

大乘の性相には、名は言語を体とすと云へり。而れども彼を以ては正しく言語を体とする義顯はれず。今の教にて顯はれつるなり。

説の位にて行の成ずるも名体不二の故なり。然りと雖も名体別に無きに非ず。諸経の意にては名は言語を体とする故に、聖人称名するも言語を体とす。是の故に凡夫称名するも位同じと云ふなり。

「三心既具無行不成」の謂れにて弥陀の体に帰しぬれば、功德残りなく身に具足する故に、成ずる所の定散は皆南無阿弥陀仏と云はるる時、九品の行と名号と云はるる体と分別しがたきなり。是を意

① 彌の故に「故名阿弥陀と」

② 彌名は言語を「名を言謂れの」

③ 彌説「異本に「觀」又異本に「益」

註 此れより以下「大事と云ふは是れなり」までは述成の第十四節の文と略同。

④ 彌成ずる所の定散は「異本に「所為也」

彌異本に「所為也」

⑤ 彌行と「行が」

彌「正行となつて」

得る様は、定散は同体なれども仏の功德にもたるる方にて南無阿弥陀仏とは云はるるなり。是即ち仏と衆生と「彼此三業不相捨離」と云はれて、三業離れぬ所を南無阿弥陀仏と云ひ頭はすなり。此の方にて、仏の功德の定散の衆生の身をはなれず成じ玉へる報仏の功德なれば、彼の体悉く南無阿弥陀仏と云はるるなり。又彼の定散の体を衆生受け取りて、我が心の行く方を行ずる時を九品正行と云ふなり。然れば一物なれども仏に持たせ奉りて云ふ時（と衆生の方に行ずる時と）の替り目なり。衆生の方にては觀仏三昧の定散なり。仏の方に持たせ奉りて云ふ時は念仏三昧の体なり。惣じて仏の功德衆生に隔てぬ所に南無阿弥陀仏と云はるる体は立するなり。大事と云ふは是なり。

助正を分別する事は正を立せん為なり。故に能為の位は三心の法門なり。正既に立しぬれば助とて相對する体なし。所為の位にて悉く正なり。一一願言の積註1の謂れ是なり。選択註2に五種正行の文を挙げ

① 體の「なし」

② 體體「仏」

③ 體受け「請」

④ 體行く方を「機方の行になして」

⑤ 體に「を」

⑥ 體と云ふは「とては」の横に「異本に「云は」と註す。

⑦ 體能為の位は「異本に「機の位には」

註1 玄義分二乘門の積

註2 選択集第二章

て後に、「本願義至下可知」と云ふ釈文、此の意なり。是則ち今の念仏の体と云へり。「彼仏及土既言報者」等の問答の心なり。然れば五乗齊入の体をやがて名号と意得べし。是則ち覚他円満の謂れを以て法報高妙の土に入る事、諸仏の功德を成じて隔てず撰取し玉ふ故なれば、菩薩の位なりと云へども必ず真の報仏の土に生じ難きなり。唯仏与仏の境界なるべし。然るに彼の五乗悉く覚他の謂れを顯はす念仏なり。爰を以て五乗悉く南無阿弥陀仏の所為の念仏の体を得つれば返りて能請所請南無阿弥陀仏なり。此の時は一代も悉く念仏なり。是くの如く意得つれば返りて自力他力を分別して自力をすつる体を取りて助と立て、助と云ふ体を取りて所為の位にては皆正と立す。彼の名号に、仏の四智三身の功德をおさめたる故なり。『往生要集』の釈には彼の面猶諸仏の名号の謂れに同ずるなり。今、垢障の凡夫の上に成ずる所の別願の名号なる故に、諸大乘經と云ふは心を本と説く、彼の心を『觀經』には三心と説きて成ずるな

① 體本願「其本願」

註 支義分二乘門の釈

② 圓齊「なし」

③ 圓べし「へきか」

④ 圓隔てず「凡夫を隔てず」

⑤ 圓境界「異本に「院家」

⑥ 圓請「側註に「為か」

⑦ 圓請「側註に「為か」

⑧ 圓時「所」

⑨ 圓すつる「捨てつる」

⑩ 圓なり「に」

⑪ 體に「なり」

り。此の三心とは仏智の底に有る所の体なり。而に彼の体を釈迦仏
 言語を以て受け取りて説き顯はし玉ふ時三心とは云ふなり。願体に
 有るほどは唯仏智と云はれて有るなり。釈迦の受け取りて説き顯は
 し玉ふ時、第三の機領解すれば、「称註仏本心又顯弥陀願意」と云は
 れて、願体に帰する南無の謂れを成ずるは、三心の意ながら仏体に入
 入りて彼此三業等の体立し、此の時大乘の心と説く処の謂れ成ずる
 なり。此の心を以て深心の中に正定業と積して、三心が体にある所
 を顯はすなり。此則ち願体に有りては三心と説かるべき謂れの有る
 なり。第十七の願の称讚我名の体なり。此を第十八願には至心等と
 説くなり。是くの如く心得つれば、釈迦の自開し玉ふ三心を領解しつ
 れば、やがて弥陀の体に入りて三業悉く名号南無阿弥陀仏に落居す
 れば、所作の善体皆南無阿弥陀仏と云はるる所を取りて、和尚は破
 壞したる伽藍を修造し、浄土の变相を書き玉ふと云ふも、是悉く南無
 阿弥陀仏と思召す故なり。此の位に入りぬれば、善き心をおこせと

① 願體に「を」

② 願釈迦仏言語「釈迦の仏言」
願「釈迦は仏語」

③ 願顯はし「なし」

註 親経疏序分義、散善願行縁の積

④ 願「仏の本心に叶ひ弥陀の願意
を顯はす」

⑤ 願願體「體を」

⑥ 願此則ち願體「此別願の體」

⑦ 願願有りては「有るとは」

⑧ 願第「なし」

⑨ 願願善體皆「善體にて」

⑩ 願と云ふも是「と已に」

願「も已て」

も云はず、心を閑めよとも云ふべからず。所作悉く南無阿弥陀仏の外に立せざるなり。是即ち依正二報の体第三の機の上に於て成ずる所の体なれば、塔を立て仏をつくり(経を)書くも皆南無阿弥陀仏なり。平生は自然に此の位に当るなり。

今此の觀經に付きて三心正因三福正因と積し玉ふ位、能く能く分別すべきなり。先づ三心正因とは、釈迦一代の大乗顯密の謂れ、皆、心を本と説きて、此の体にかうらせてもであつかふ。然るに彼の心に依らずして、仏力を以て彼の自力の心と説く所の説を、他力の体に説かるる所を心得出だして、仏教と云ふは、是くの如く教へける物をと、心の謂れを分別するを三心正因と教へて、十一門の第四の位に置くなり。三福正因と云ふは、三心正因に依りて他力に帰する所に無行不成と謂はるる位にて、一切の善体悉く我が身に具足する善行を、正因正行と分別するなり。然れば即ち光台密益の見とは、見るべからざる所を仏力を以て見つれば、不生の報土へ願力に

① 閑閑めよ「閑」

釋「用よ」

② 閑平生「平感」の側註に

(原本のまま)

釋「平感」現文のまま

③ 閑謂れ「顯れ」の側註に「謂」

④ 閑と「として」

⑤ 閑かうらせて「からかわせて」
の横に「かうらせて」と註す。

釋「からかわせて」

異本に「あらかわせ」

⑥ 閑謂て「ち」

⑦ 閑の説「なし」

て凡夫生ずと、釈迦の仏力弥陀の願力の謂れをみだれず分別して、
 観經の体を意得べきなり。釈迦の仏力は、心を静めて成すべき所を、
 釈迦の力にて彼の仏の功德を成じて浄土の体を見るなり。此の見
 と云はるる分齊を十三觀と説きて観仏三昧の体と成じて、十六觀に
 ④ 亘るなり。此の謂れ即ち上三品の往生の体なり。此の面を以て云ふ
 時は、釈迦一代の説の次第を亂ぜずして、戒定恵の三学と立して、
 菩薩戒の上に今観經を説きて、戒体の上の行の位にて、自力他力
 を分別して、失此法財と云ふ釈を造るなり。何かにも釈迦教の面
 ては、心を本と取りて、行の成不を先とするなり。仏力とは此の心
 を我としづめずして、他力にて成ずる所の相なり。下三品は弥陀の
 願力の体を押へて説く故に、仏法と世俗との二種の善根なしと釈し
 て、無碍光の体の外には何にも叶はずして、頓に無善の凡夫の上に
 成ずる所なり。下品中生殊に此の謂れを説くなり。弥陀教の心はな
 り。釈迦仏力弥陀願力此の二の觀仏念仏の体を分別して、菩薩戒の

① 観みだれず「亂さず」

② 觀を「は」

③ 觀はるる「なし」

④ 觀亘る「亘す」

⑤ 觀を「に」

⑥ 觀と「として」
觀「とすると」

⑦ 觀不「否」

⑧ 秘下品中生「中品中生」
 釋異本に「中品中生」
 ⑨ 觀教「經」

上に觀經は説かるるなりと云ふ説を、下三品を引きて不審するなり。心得つれば觀仏三昧釈迦の仏力と押へらるる所の定散の根本、弥陀の功德の体にかへり入りて納まる処を、所説の定散の体と押へて、念仏の位に入るるなり。今の説の体とは、此の下三品の謂れに返りて当る故に往生するなり。然れば則ち願体より説き出だす方と、釈迦出世の謂れより化前の体立して願海に説き入るる(と)、此の二の謂れ觀經に有るなり。二教の面となるなり。

此の法門の次に菩薩戒の三重玄義註など云ふ謂れ、觀經の三重六義の積(と)一つ謂れなりと云ふ事、只自身一人思ひ定めつるを得分にてやみなんとするなり。人に云ふまでは無くとも、此の心を覺り得、師の心を仰ぎて目をおしのごはせ玉ひつる。あやまちて我が身にも猶思ひ定むる所を云はんやと思ひつれども、若しは一身ばかり思ひつる得分までとなり。此の謂れを心得て和尚の御心をさぐれば、戒品を守り玉ふ事皆此の意なりと知る。

① 翻云ふ説を「異本に「云い説て」

② 翻根本「根本の」

③ 釋説の体「信の体」

④ 翻「言ふ体」異本に「信の本」
④ 翻然れば則ち「然る則は」

⑤ 翻海「力」

翻「体」

註 天台の菩薩戒義記に釈名、出体

料前の三重の玄義を立つ。是れ天台の常の積に五重の玄義を立つるに異なる所にして深義ありとは三銘寺流戒家に伝える所、実導の講録に就いて見よ。

三心は領解の心なれども、三に分別すれば、能請所請眞実心なりと信じつれども、此の時は未だ心の位をばとけやらぬなり。故に道綽等の、報仏報土を立すれども、念仏の位定散の分をばはなれぬなり。能説所説と云ふ時、「定散文中」等の謂れにて念仏名号報仏の別号と定まるなり。然りと雖も心の位をぬけ出でたる事をば、能爲の位にて二門をふさねてあつる時頭はれて、無行不成の謂れを立するなり。然れば即ち正しき領解の心を云はば、一代の説の、心を本と説く心によらずして、報仏覚他名号に説き入るる処を、眞実の心と押へるなり。一代の教に依ると云ふは、願に依る機を成ぜん為なりと、分別する処を至誠心と説くなり。深心とは彼の心によらず(して)報仏の別号に落居して他力の行体の立する所なり。定散文中等と云はるる体を指すなり。然りと雖も行体の姿未だ頭はれず。心の位をはなれはてぬなり。

第三心は、一代此の別願の体に帰せよと説(き)ける物を(と)、過

① 種別「割」

② 極所請「所請の」

③ 極信しつれども「云はるれども」

④ 種時「所」

⑤ 極種と「わ」

⑥ 極門「門」の横に(心か)と註す。

種「心」

⑦ 種ふさねて「をさへて」

⑧ 極正しき「なし」

種「正しく」

⑨ 種教「底本には「報」

去生々に修せし所の善も、又他の一切の善(も)皆此の謂れなりけり
と知る処に、随喜の心立するなり。是即ち一切善、心と説く先に我
等が為にうときなり。心によらずして他力に帰して得益すと一代は
説きける物を、と意得つれば、諸善悉く親しく成りて他の善もうち
からず成る時、随喜の心立するなり。

一代を是くの如く心得、三心の心を以て成じぬれば、此の上に無
行不成と謂はるる時は助正など分別する事なし。悉く所為の位にて
名号の体をば成ずるなり。屋舎の譬と云ふは是なり。弥陀因中の行
体成ずれば、我等が上に悉く成ずる処の無行不成の謂れ立すれば、
やがて諸善悉く名号となり、下品中生の「為説阿弥陀仏乃至光明神
力」等の所説を、弥陀名号を聞く等と積し玉ふ是なり。下品上生は
能説所説の謂れを押へて説く故に、心浮散す等と積して仏名是一等
と積成するなり。下品下生は行相を説く、他力の名号の体を成じて
十六観の義を結するなり。「此人苦逼」等と説きて此の機の上に心

① 圓心 = 「心と」

② 圓圓一切善、心 = 「一切善心」

③ 圓先に「先にとともに」

圓「先に」

④ 圓圓他 = 「何」

⑤ 圓圓三 = 「三の」

⑥ 圓圓など = 「と二に」

⑦ 圓譬 = 「解」

⑧ 圓心 = 「心に」

⑨ 圓圓義を「体と」

によらぬ行相を成ずるなり。(無行)不成の謂れ立する上には、勧むるよりして真実の念仏と謂はれて、定散浅深を簡ばざる正定業の謂れ(に)落居して、所為の善体にて念仏と云はるるなり。

仏法の大綱を知る所を菩薩戒と云ふべし。其の大綱とは止悪修善なり。止悪修善なるべきは、罪の輕重の理をも、善の成ずる方をも知らずる事、菩薩戒其の法体と成るべき事なり。是即ち止悪修善は仏法の惣体なり。仏と申すは覺なり。「自覺覺他覺行窮滿」等と釈す。仏の悟りとは止悪修善を自身にもきはめ、人にも悟らしめ玉ふ所なり。然れば仏法に入るとは止悪修善と云はるるなり。即ち戒なり。三種淨業とはやがて自覺覺他なる故に、菩薩戒の謂れの上に念仏の別願は立すべきなり。いかにも觀經は善体先立ちて彼の体成ずる様を説く故なり。序に化前序立して一代を押へて後に、正発起の六縁と分別して、欣淨縁の密益を顯はさんとして、顯行示觀の二縁を立して、顯行の善を押へて示觀するなり。此くの如く善体をまづ立し

① 圓ぬ「ば」

② 圓定散「定散の」

③ 圓簡ばざる「不簡」

④ 圓簡云ふ「す」

⑤ 圓らする「りぬる」

⑥ 圓願菩薩戒「菩薩戒の」

⑦ 圓惣「正」

⑧ 圓覺「覺他」

⑨ 圓入るとは「入ると云ふは」

異本に「人とは云ふは」

⑩ 圓種「福」

⑪ 圓淨業「底本に「淨戒」

⑫ 圓善體「善体を」

⑬ 圓立ちて「置きて」

⑭ 圓體「体を」

⑮ 圓顯序「を」

⑯ 圓示觀「示觀と」

⑰ 圓まづ「先に」

て觀經の体を成ずと心得れば、眞実凡夫の上に仏法の謂れ有る処を押へて、彼の体を失此法財と立して顯はさん為に、菩薩戒の上に説く所の体を得るを別願の体を顯はすと云ふなり。決定往生の位能く能く思ひわくべきなり。

但し道綽禪師の七日百万遍をすすめ、古上人の御房一日七万遍乃至十万遍等あてがひて、決定往生の業の体を押へて所信の謂れは、中々とらへたる所あるに似たれども、彼の積による処の立信の体かすかなる者なり。和尚の御意は必ずしも人に依らざるなり。而るに三万を以て^⑤数の本とし玉ふと積したり。祈請の夢の所作の時にも其の數に過ぎず。阿弥陀經の卷數を後に増すと云へども、念仏の數は三万なり。『觀念法門』にも三万をして上品上生を定め玉ふ(処)なり。然りと雖も數の多少を定めて体と思はへたるとは積せざるなり。故に深心に不審なき心立せば左右無き事なり。道理を思ひ分くるところ何かにも有るべきなり。

① 秘翻を「に」

② 秘翻と云ふ「者」

③ 秘決定往生「決定往」

側註に「本ノママ」

④ 秘位「信を」

翻「信心を」

⑤ 翻以て數の「以て數を」

翻「數を以て」

⑥ 翻を「と」

⑦ 秘翻心「心を」

本云此抄者更不可及他見者也

甚深微妙之法門可秘々々